下澤陳平書柬　單

G 25
86

拜啓仕候 櫻花爛熳の候先生愈〻御清福為邦家奉南寿候 陳者小生ハ
先年 先生の当弘前に御出の折 齋吉旅館及弘前図書館樓上にて親しく御面
謁を賜はり候 陸奥史談會々員の一人に有之候か本年一月以来東奥日
々新聞に掲けられ候 澀江抽齋は津軽藩士の一人なると且つ小生は抽齋
の自筆本を珍蔵致し居候為め 一入ゆかしく数度繰返し拝読仕候
先生今回の御執筆によりて我が津軽藩史の缺を償ふもの夥多なるべし乎
[illegible]相違ふ毎に之が訂正に上り先生御調査の緻密なるなど感佩
罷在候 就いては遥かに感謝の意を表し且つ御参考とに別紙の如く
抽齋に関する事柄を小生座右の珍本中より抄録して差上申候 尤も既載のも
に就きて二三の所見をも加へ申候へは御一閲の節御閲讀を賜はり且
つ御手数を煩はるを得ば幸栄之に過ぎ不申候 尤も右中にて御用もなく候は

東京帝國大學圖書之印
B 23475

いゝ御言付けを給はり度く 寄せは先生先年御目伴の八木沢氏旋君
とは中等校時代の旧友にて先年と某市の新士社に衣食致し居り
が昨年社を退き目下先考係初の遺稿編纂に従事罷在り係初
は川田剛先生の門下生にて外崎覚氏とは存生中父子の如く親しく
致し候間柄にて飯田君とも御懇に致しおり
先は要用まで 得貴意度 如是

大正五年四月七日

下澤陳平

森林太郎先生

侍史

官版説文解字真本　文政九年刊　十冊

本書各冊とも巻首に弘前医官渋江氏蔵書記、平井文庫、福田文庫、中田蔵印の捺印あり 第十冊の巻尾に慶應己丑火後新收、東堂閑人の捺印あり 渋江氏蔵書記の印は その下にも印影あれども読むべからず

今を去ること廿数年前弘前の古物商より目下の所有主福山千瓢氏買求めたるものとす

思ふに本書は渋江氏より平井氏へ平井氏より福田氏へ福田氏より中田氏へと転々せるものゝ如し

各冊とも朱書、墨書、青書を以て抽斎先生の訂正に係るものにて先生の精力驚くばかりあり 各冊の巻尾に訂正以外の文字として先生の記することと左の如し以て本書訂正の年代を知るべし

一冊巻尾
丁亥初冬以読蔵秘書所收説文繋傳校合
戊子初春以説文五音韵譜校合又説文斠詮校合
三冊巻尾
文政十一年正月廿日以説文繋傳校正于本所直舎
九冊巻頭
繋傳附録王氏應麟玉海　説文解字繋傳四十巻南唐徐鍇楚金傳釈
朱翺反切按鍇通釈一至三十部叙三十一至三十二通論三十三至三十五袪妄
三十六類聚三十七錯綜三十八疑義三十九系述四十今亡第二十五巻
繋傳廿五巻自系至卯今本全取徐鉉本所補足故与此本大合且係載
鉉説不載鍇説

十冊巻尾
天保十年十二月朔以説文正字校雒田直瀬氏懐仙閣所蔵也原為書特以本
書部首之字揭出篆体其下雙行載解釈而文多纂節蓋宋時俗間略本
也首尾俱欠新雕入篆説文正字一巻敘殷字缺筆有経筵及高麗国
十四葉辛巳歳蔵書大宋建中靖国元年大遼乾統元年 廿五字朱文 二印記
即北宋時高麗国所刊而入其王書庫中者全書総十一張得從他日手
抄

致身温故録　一冊

本書は先生曩年当弘前師団へ御出しおり弘前図書館に於て御覧に入れやりものあるか武鑑の蒐集上御参考にもならんと存せられおまし本書中に収録されし書籍名を抄して贈呈致し候　渋江先生の自筆本にて其後工藤某の手に入りしを沽却され昭和十八年七月自分の又之れを古道具屋より求めて只今珍蔵致し居り

新撰御紋尽　明暦四年二月吉日松会開板全一冊　君庫所蔵又一市人小金氏蔵

当家御紋尽　明暦四歳七月吉日新板全一冊　細井利恒蔵

増補江戸鑑　万治三子八月吉日江戸長谷川町山形　以下破缺　一市人蔵

一書　失題名按寛文十年十一年開刊本　一市人蔵

新撰御紋尽　寛文拾壱辛亥年初春吉辰日松会開板全一冊　神戸秀越蔵又比良野貞固蔵

一書　失題名按寛文十一十二年開刊本　一市人蔵

江戸鑑　寛文十二壬子年　神戸秀越蔵

一書　失題名按寛文十二年開刊本　一市人蔵

御紋鑑　通油町開屋開板按寛文十三年開刊本全一冊　渋江允成蔵

江戸鑑　寛文十三年丑卯月吉日日本橋南二町目経師屋加兵衛　全一冊

伴矩道蔵

諸大名御紋尽　延宝二甲寅年孟春吉日松会開板全一冊　渋江允成蔵

江戸鑑　按延宝四年開刊本全一冊　平井俊章蔵

正極江戸鑑　延宝六年日本橋南二町目経師屋加兵衛　全二冊　渋江全

一書　失題名　延宝八年庚申　神戸秀越蔵
太平江戸鑑　延宝九辛酉年皐月中睆急綫序之　全一冊　一市人　小倉氏
蔵
新撰武家泰平江戸鑑　天和三年癸亥五月初旬　全二冊　神戸秀越蔵
一書　失題名　按天和貞享年間刊本　神戸秀越蔵
江戸大繪圖　貞享元甲子歳五月吉日　浅草瓦町　表紙屋市郎兵衛
板　榊原台谷蔵
江戸大繪圖　貞享二乙丑歳正月吉日　浅草瓦町　表紙屋市郎兵衛
那須家蔵
江戸鑑大全　按貞享二年三年間刊本　君庫所蔵　又澀江允成蔵

本朝武鑑　按貞享二三年間刊本　那須家蔵
丙寅江戸鑑　按丙寅即貞享三年　澀江全善續補
一書　失題名　按貞享年間刊本　神戸秀越蔵
一書　失題名　按貞享三四年間刊本　神戸秀越蔵
一書　失題名　按貞享三四年間刊本　安西恒利蔵
全善丁未秋所購得与此全同題曰戊辰江戸鑑　即貞享五年
一書　失題名　按元禄之二年間刊本　澀江允成蔵
一書　失題名　按元禄三四年間刊本　市原幸充蔵
太平武鑑　元禄五壬申年　江戸日本橋南一町目書肆寸原茂兵衛　澀江
允成蔵　又不知何人蔵
本朝武系當鑑　按元禄四五年間刊本　榊原台谷蔵

東武綱鑑 元禄五年仲呂松會板 一市人蔵
太平武鑑 元禄七甲戌年江戸日本橋南一町目寸原茂兵衛 一市人蔵
太平武鑑 元禄七甲戌年 江戸日本橋南一町目寸原茂兵衛 全二冊
神戸秀越蔵
太平武鑑 元禄八乙亥年江戸日本橋南一町目書肆寸原茂兵衛 神戸
秀越蔵
江戸鑑 元禄九年戊子 神戸秀越蔵
改正太平江戸鑑 元禄九丙子年五月吉日 萬屋庄兵衛 神戸秀越蔵
系禄図鑑 元禄十丁丑歳御書物所長谷川町松會三四郎 全四冊 平井俊章蔵
國花萬葉記 元禄十年 遐江允成蔵
東武綱鑑 按元禄十二三年間刊本全四冊 遐江允成蔵

一書 失題名 元禄十三辛巳歳武江日本橋南一町目書林須原茂兵衛蔵
板 全四冊 市原幸充蔵
系禄図鑑 元禄十五壬午歳御書物所長谷川町松會三四郎 全四冊 榊原
台谷蔵
江戸道中記大名鑑 按元禄十四五年間刊本全一冊 伴矩道蔵
太平武鑑 元禄十六歳武江日本橋南一町目書林須原茂兵衛蔵版 全
四冊 伴矩道蔵
一書 失題名 按元禄十五六年間刊本全一冊 平井俊章蔵
元禄武鑑 元禄十六癸未季夏通油町井筒屋三右衛門板 全一冊
遐江全善續補
一書 失題名 宝永元甲申歳改武陽牛込燕雀堂平野屋吉兵衛板

按與前書同板但易書肆名氏耳
一書　失題名　按宝永元年夏秋間刊本　澀江全善續補
前禄武鑑綱目　宝永二乙酉歳武陽江府書林日本橋川瀬石町山口
屋須藤権兵衛　神戸秀越蔵
一書　失題名　按宝永三四年間刊本　松本定固蔵
一書　失題名　按宝永四五年間刊本　平井俊章蔵
一書　失題名　按宝永五六年間刊本　平井俊章蔵
一書　失題名　按宝永五六年間刊本　尾坂尚謳蔵
東武明鑑　宝永八年卯歳武陽江府書林日本橋川瀬石町山口権
兵衛　全三冊　澀江允成蔵
一書　失題名　按正德二年三年間刊本　德永正武蔵

一書　失題名　按正德四年夏秋間刊本　澀江允成蔵
御林武鑑　正德四甲午歳江都書林日本橋南一町目須原茂兵衛蔵
板　全四冊　山鹿高厚蔵
文明武鑑　按享保二三年間刊本　澀江允成蔵
永世武鑑　享保四己亥年日本橋南一町目山口屋権兵衛開板　全
四冊　神戸秀越蔵
永世武鑑　按享保四五年間刊本　德永正武蔵
享保武鑑　按享保五六年間刊本　勝本蔵
享保武鑑　享保六辛丑歳江都書林日本橋南一町目須原屋茂兵衛
蔵版　全三冊　那須家蔵
永世武鑑　享保七壬寅歳武陽江府書林日本橋南一町目山口屋権

兵衛開板　全四冊　澀江允成蔵

享保武鑑　享保十一丙午歳江都書林日本橋南一町目須原茂兵衛蔵板　全四冊　今大路家蔵

諸大名御席記　享保十三戊申年改江戸京橋南四町目和泉屋儀兵衛板　全一冊　澀江允成蔵

一書　失題名按享保十六年間刊本　伴矩道蔵

享保武鑑　享保十九甲寅年新改正江府書林日本橋南一町目須原屋茂兵衛板　全五冊　神戸秀越蔵

御参勤御暇御交替録　按享保十八九年間刊本　全一冊　伴矩道蔵

一書　失題名按享保十九廿年間刊本　戸澤盛鎮蔵

享保武鑑　享保二十乙卯年新改正江府書林日本橋南一町目須原屋茂兵衛蔵板全四冊　澀江允成蔵

右所引通計七十一部　重四部

君庫所蔵　二通　那須家　三通
今大路家　一通　澀江允成　十四通
神戸秀越　十三通　平井俊章　五通
伴矩道　五通　榊原台谷　三通
徳永正武　二通　市原幸充　二通
市人小倉平兵衛　二通　細井利恒　一通
比良野貞固　一通　安西恒利　一通
松本貞固　一通　尾坂高温　一通

勝本　一通　戸澤盛鎮　一通

山鹿高享　一通　市人　六通

不知何人　一通　澀江全善　一　續四通
補

跋

同藩伴矩道好事之士也公務餘暇旁聚古書嘗有此撰

比者借閲一遍乃課児恒善影寫畢功且録入近日所獲

釘爲一冊其題温故致身録者予之所贅也辛丑備日澀

江全善識

コノ印ハ他ニモ捺セルモノアルヘシ抑詠手ノモ字ハ他ニ誤シヨウナシ昨春数ヲ歴ハリタシ

コノ印ハ上ノ方ハ　字依青歸、不述甚解、醫宗三萇、必酌其原、ト四字ツヽ四ク下ノ方ハ　御路平抽肯、渋江氏平姓、全善道純、ト三行ニ刻セリ　但シ読ミ誤リアランカモ知レス御示教

御紋畫　不記年月但題簽記寛永御紋尽後人所書因攷蓋寛永末年所刻而正保慶安間漸次改刪者　澀江全善藏

御屋敷付　元無題名末記正保四年三月日　澀江全善藏又大石良臣藏

海陸不求人　不記年代考慶安初刻至萬治末追改　澀江全善藏

知行付　附諸役及国尽　元無題号且不記年月攷蓋承應三年所刊　澀江全善藏

指物揃　原寛永十四年刊明暦二年増補改板題云御馬印明暦三年再板縮刻即此　但无題名　澀江全善藏

屋敷付　巻一御公家分限帳巻二以下御旗本諸大名御役并屋敷付巻五末隠居衆一万石以上嫡子御書院番衆火事時寄場

澀江全善蔵

御紋鑑　失題名寛文九己酉初春吉日松會開板　澀江全善蔵

書札礼法　巻之家中之知行高次第記之　延宝九年酉正月吉日
京二条通丁子屋町鶴屋喜右衛門板　澀江全善蔵

難波鶴　延宝七己未年　澀江全善蔵

増補京江戸鑑　延宝八年十月吉日　大石良臣蔵

一書　失題名　蓋難波鶴之類　貞享元年　書中有所考刻　大石良臣蔵

江戸図鑑綱目　坤　元禄二年　澀江全善蔵

江戸図正大全　元禄七八九年開刊　澀江全善蔵

節用大全　国師石川流宣　宝永六己丑年春正月穀旦　日本橋南一町
目松葉軒主萬屋清兵衛　澀江全善蔵

国分武鑑　失題名及年月　攷享保十年刊　澀江全善蔵

致身温故録は以上の書籍に記載されし津軽藩自の所をそのまま写して糊付したるものあるが江戸鑑図目録と作対照ありたるに於ては御参考に資する必あらんと存せられし之序致身温故録は跋文により天保十二年に抽斎の写せるものあることを知られて跋文後の補遺はそれより後ちに順次加へたるものにあらざるか　江戸鑑図目録の成りし時代を取り定むべく

比良野助太郎貞彦

渋江抽斎もの二十六に助太郎貞彦のこと出て居るが不肖の先考保脩の編
集に係る津軽藩記伝数には貞彦を画人伝中に収め其御参考之に
抄録して差上ヶ於 貞彦没去の年月日と年齢、その父母の名御墓所も
ひゝはし 事実に在りし

比良野助太郎貞彦は初め房之助と云ひ江戸定府の士なり寧親公御代
江戸御留守居となる 画術に熟練し安永五年より江戸藩邸の名援せり
貞彦画を善くし外濱又嶺雪と号す一年公駕に従て津軽に下る数
旬間の暇を乞ふて山野河海を跋渉して其見る処を図して一巻とし号し
て外濱画巻と云ふ山崎道冲、伊建尹、沢元愷の序跋あり又善知鳥を
数羽摸して一軸とし夫れに雑話を添へ一冊を著はしたり 記中橘嘉
樹（大塚市郎右エ門字敬卿号蒼梧亭）伊勢貞丈等の問答を載せたり又江戸より津軽迄の
道中記に山川地理以下の図及び記を載せて一冊とせり貞彦常に谷
文晁、伊勢貞丈等に交り名江湖の間に顕はるといふ
貞彦の津軽に下るや画人毛内雲林、松宮保篤等貞彦に従ひて唐
画を穿鑿せり是れ津軽にて唐画の権輿ありと云ふ
貞彦嘗て信明公の近習を勤めしが天明八年八月十五日公近習を
供にて四の郭へ被為入月見可被遊とて侍臣一統心のまゝに吟詠致し
へハ甚た御機嫌にて助太郎も致せとの御事なるに強て御辞退申上し
に侍臣一統無理に進めけれハ貞彦左様ならは恐入可奉申上とて
　御家中は雨漏る家に月見かな
公御笑ひ遊 助太郎月見はよしに致すへしとの御詞にて御帰り遊ける

とあり此頃も作後の疲労癒えす家中難渋を極めけるあり

以上

拙斎その四十二に二子優善矢嶋玄碩の末期甚子とあるとあり此の矢嶋氏死去の年齢御調べに候はゞ御示教乞ふ尚小生所蔵記録の中に玄碩の逸事として左の事を記載致し候へばこの年代を承知致し度く希望に候

弘前藩医矢嶋玄碩 寧親公御供にて御国下りの節津軽の景色を歌によめとおほせられければ

春はなく夏は短かく秋早く冬はながある陸奥の里

とよみたれとも主人の気をあしうそこなひ候よしにて閉門被仰付たりと傳ふ

舊藩日記抜録　「拙斎」今後の御掲載に多少の御参考と

一 慶應四年二月廿三日御近習医者小野道秀 高二百石八人扶持 倅表医者小野道悦 三人扶持勤料 家内召連 江戸表出立道中廿六日振にて三月十八日弘前到着此頃江戸在府の士大抵此節に下る

一 明治二年九月 日欠 矢川文一郎へ渋江道陸妹後妻縁談願之通許之

一 明治三年五月 日欠 渋江道陸弟専陸於軍務局楽手稽古被仰付

一 〃 九月十三日 渋江道陸之矢嶋周禎親玄碩義去月十五日出奔仕聢入候ニ付御奉公遠慮伺出 道陸不及遠慮旨被仰付之

一 〃 九月十七日 周禎遠慮御免

一 明治四年三月九日 渋江道陸 願出
私儀於医学校修力仕罷在候得共尚弘く修行仕度御座候ニ付以自

貴兄御登之上洋学勤学仕度奉存候被仰付被下置度奉願候以上

未三月九日　澀江道陸

私儀親類澀江道陸義以前紙兄御登之上勤学仕度奉願候義ハ元来東京表ニ親類之者も有之旦暮皆以自貴勤学仕臨時聊御扱向不奉願萬事私引受奉願候義ニ御座候間何卒同人願之通被仰付被下置度此段奉願候以上

未三月九日　比良野房之助

一 三月廿日江戸へ出立之旨届出あり許之

一 道陸は成善の改名と思はる 元治元年江戸家中分限帳に澀江道陸あり改名は何時頃に候や

澀江抽斎の内

その十一　津軽家の七万石とありしを文化元年五月と記載ありこは文化二年五月のあやまりに候

〃　詩会を催して允成を召すこと殆と虚日なし 寧親の歌に巧みあるはきこしか詩についてはきく所なし 定所詩集等に寧親の詩についての記載あらんには承り度く候

その四十二　峩齋(平井)の子が仙庵 仙庵の子が東堂　峩齋は通称を仙右エ門字を維章と云ひ仙庵は後ちに父名を襲て仙右エ門と云ひしも幼名の仙庵はきく所なかりしに初めて承知せり 東堂は通称を清太郎と云ひ書を沢田東里に学び遂に東の字を受て東堂と号せり 明治五年九月十六日弘前に於て歿す年六十ある

その四十六　加藤清兵衛、兼松伴大夫、兼松三郎　此三人は兄弟なり御承知に候

はんれ中上〜

その四十九　江戸定府を藩地に移すことを献言せしことを　安政元年とあせるかこは安政元年にあらさるか此年兼松三郎は藩地に帰住を許されしか未た発するに及はすして世子の卒去あり続きて継嗣問題起りて中止となりしも三郎の帰住許可を以て推するに安政元年の献言なるべし　但し澀江家に当時の献言についての詳細にても有之候や余か之考と三郎とは最も懇信にていへは三郎の略傳中なる事柄を以て安政元年とあせり蓋し三郎の直話に基きしか如し　なほ三郎か咎を受けて江戸を発するとき　抽斎か贈りし　四言十二句の全文を承り度く候